

Ⅱ. 調査・研究報告

古代山林寺院・忍頂寺と千堤寺遺跡群

清水 邦彦

1. はじめに

大阪平野北部（三島平野）から北摂山地を望んだとき、一際美しい山容を誇る山の存在に気づく。山の名は竜王山。日本列島では古くから美しい山を信仰の対象の一つとしてきた。竜王山もまた左右対象で、かつ山頂がなだらかとなる秀麗な山容を誇り（図1）、信仰の対象となる山の条件を満たしている。

竜王山山頂では古墳時代のものと思しき須恵器が採集されており（京都府立大学考古学研究室2019）、竜王山の信仰は古墳時代にまでさかのぼる可能性もありうる。

このような山への崇敬や畏怖の観念から生まれたアニミズム的な信仰は、仏教と結びついて山岳仏教が成立していく。山中に営まれた寺院の事例は7世紀後半からみられるが、竜王山にも古代寺院である忍頂寺が存在した。現在も、子院の一つであった寿命院が「忍頂寺」（註1）として法灯を伝えている。

近年、この竜王山が古代の七高山の一つである神岑山であったという見解が示された（榎木2012、清水2015、吉川2019）。また、文部科学省科研基盤研究（A）古代「仏都圏」の社会と文化に関する地域史的・比較史的研究（研究代表者：吉川真司）の一環で、竜王山の発掘調査を京都府立大学考古学研究室と茨木市立文化財資料館の共同で実施したほか、新名神高速道路の建設に伴っ

て竜王山周辺の千堤寺遺跡群の発掘調査も実施された。開発が少なく考古学的情報が乏しかった山間部において、竜王山やその周辺について飛躍的に情報の蓄積が進んだ。本稿はこれらの調査が落ち着いた現段階において、一度、竜王山と忍頂寺に関連する史料や考古資料、さらにはその周辺遺跡について、先学の研究成果や前稿（清水2015）を踏まえ、総合的に検討することを目的とする。

2. 竜王山と忍頂寺

まず、竜王山について、みていこう。竜王山はその名前から竜神信仰を想起させる。

実際に、安永3年（1774年）に建立された竜王山中腹の宝池寺は「竜の骨」を寺宝とするほか、元禄5年（1692年）の「寺社吟味之帳」（吉岡家文書）から、寿命院内に「竜王之鎮守」という板葺きの祠があったことをうかがえる。また、宝池寺までの道程にある丁石や、同寺へ奉納された額、さらには周辺地域の史料からは、近世から近代にかけて雨乞いの竜神信仰があったことを知る事ができる（高橋2015）。

一方、寛政8年～10年（1796～1798年）に刊行された江戸時代の摂津の地誌である『摂津名所図会』では「忍頂寺山」と記されている。また、大阪画壇の一人である上田耕沖が描いた『摂州嶋下郡忍頂寺山八大龍王社』にも、その表題中に「忍頂寺山」とある。



図1 南から望んだ竜王山

これらの史料から、江戸時代、竜神信仰の存在とは別に、竜王山は忍頂寺山と呼ばれていたと考えてよいだろう。

では、これより以前はどうか。時代は大きく遡るが、古代における山名をうかがえる史料がのこされている。平安時代に編纂された『日本三代実録』である。以下、その記述についてみていこう。

史料1 『日本三代実録』貞観2年(860年)9月20日条

伝燈満位僧三澄奉言。神岑山寺在_二撰津国嶋下郡_一。三澄奉_レ為_レ国家_一所_レ建立_レ也。春演_レ説最勝王経_一。秋吼_レ講法華妙典_一。請_レ為_レ御願真言一院_一。賜名忍頂寺。詔許之。

この史料1の内容は、忍頂寺はもともと神岑山寺といい、三澄という僧によって建立されたが、貞観2年に三澄が御願真言院とし忍頂寺という寺名を賜りたい旨を願い出て、当時の清和天皇に許されたというものである。ちなみに、忍頂寺を創建した三澄は『入唐五家伝』靈巖寺和尚伝から、最後の遣唐請益僧である円行の弟子であることがうかがえる(吉川2019)。この『日本三代実録』の記述のなかで重要な点は、忍頂寺はもともと「神岑山寺」であったという点である。

次に紹介するのは、同じく平安時代に編纂された『延喜天曆御記抄』である。

史料2 『延喜天曆御記抄』天曆7年(953年)年4月26日条

左大臣令_二国光奏_レ七高第四神岑山忍頂寺住僧奏運等申_一。重給_レ官符_一、任_レ窓勤修。年来之間、相料御願状文_二副_レ官符案_一。仰依_レ請、令_レ給_レ官符_一。

この史料2の内容は、泰運という忍頂寺の住僧が修法について上申してきたことを記したものである。このなかで忍頂寺は「七高第四神岑山忍頂寺」と称されている。

この「七高」とは七高山のことで、国家護持のため薬師悔過が修された7つの霊山を指す。その具体的な内訳は後述する『口遊』などの史料から、比叡山、比良山、伊吹山、神岑山、愛宕山、金峯山、葛城山の7山とわかる。この記事から忍頂寺は七高山の一つである神岑山にあったことがうかがえるとともに、もともと忍頂寺が「神岑山寺」であったとする史料1の内容とも整合的である。

ほかにも、史料2の内容は10世紀のものだが、

『日本三代実録』元慶2年(878年)年2月13日条には伊吹山を「即是七高山之其一也」と記していることから、七高山は9世紀後半には成立していたと考えてよい(櫛木2012)。

これらの史料からは、9世紀後半には竜王山は七高山の一つである神岑山であった可能性が高く、そこには天皇から寺名を賜り、御願寺となった忍頂寺が存在したことになる。

ただし、神岑山の所在を巡っては諸説ある。七高山について書かれた史料として、天禄元年(970年)に成立した源為憲の『口遊』(註2)などが知られている。

史料3 『口遊』坤儀門

比叡、比良、伊吹、神岑、愛宕、金峯、葛木<謂_レ之七高山>

今案比叡山在_二近江国志賀郡_一。比良在_二同国高嶋郡_一。伊吹山在_二美濃国不破郡_一。神峯在_二撰津国上郡_一。愛宕護山在_二山城国葛野郡_一。金峯山在_二大和国吉野郡_一。葛木山在_二同国葛木上郡_一。依_二承和三年三月十三日官符_一、春秋二時各九箇日、修_レ薬師悔過_一料、每寺、給_レ穀五十斛。(後略)

この史料3には、神峯山は撰津国上郡にあったと記述されている。この「上郡」は一般的に島上郡のことと解される。そうであれば、現在の高槻市に所在する神峯山寺や本山寺との関係が考えられ、神峯山とはその北に頂上がある山(ポンポン山)をさすことになり、一般的にそう考えられてきた。

また、史料3の影響を受けて書かれたと考えられる『二中歴』第四・法場歴や『拾芥抄』下・七高山部においても、神峯山の所在を島上郡と記されている。そのため、神峯山寺を島上・島下両郡の山林寺院の総称とする説(川岸1990)や、狭義には竜王山を神峯山、広義には両郡にまたがる北撰山地の一角の霊山とする説(西本編2015)などが提出されてきた。

一方で、史料1・2の内容からは、明らかに島下郡の忍頂寺が元々神岑山寺であり、竜王山が神岑山であったと考えるべきであろう(櫛木2012・吉川2019)。さらには、史料3や南北朝期の成立になる『釈家官班記』などから、七高山で薬師悔過が修されていたことがうかがえる。現在の「忍頂寺」本堂厨子内に安置されている秘仏本尊の薬

師如来は、顔面のみ平安時代後期でそれ以外は後補だが（藤岡 2008）、七高山による悔過の趣旨からすれば薬師如来はふさわしい（櫛木 2012）。

さらに、筆者が注目したいのは、滝沢幸恵が着目した竜王山の山容である（滝沢 1999）。冒頭でも紹介したように、竜王山は秀麗な山容を誇り、信仰の始まりを考えるうえで示唆的である。根拠となる竜王山の山容について、GISを用いて確認しよう。

図3は北摂山地を3D化したものである。上図は俯瞰、下図は大阪平野北部（三島平野）から北摂山地を仰ぎ見たものである。両図からはこの一帯の山々のなかでも、竜王山のみが山頂がなだらなかでかつ左右対象の形が整った山容であることをうかがえる。ただし、東西から望むとそう見えず、左右対称に見えるのは南から竜王山を望んだときのみである。おそらく、人々が居住していた大阪平野北部（三島平野）からそう見える点が重要であったと推測する。このような山容は神奈備山と呼ぶべきものであり、信仰の対象となる山容と評価できるだ

ろう。

山容に加えて、考古学的にも竜王山が神岑山であったことを支持する資料がある。現在の「忍頂寺」東側の道路で、地元の郷土史家であった免山篤氏によって採集された考古資料である。この採集資料には瓦と土器があり、免山は瓦のうち丸瓦と平瓦の各1点について紹介している。そして、これらの瓦について「平安時代後期かと思われる焼け瓦の存在はこの事実（筆者註：元暦元年（1184年）年の出火炎上の記録）を裏付けるものであろうか」と評価する（免山 1999）。

土器についてもみていこう。その内訳は、須恵器杯片が1点、瓦器椀片が2点、青磁椀片が1点

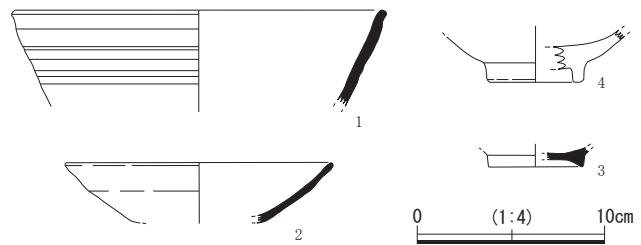


図2 「忍頂寺」採集土器（清水 2015）

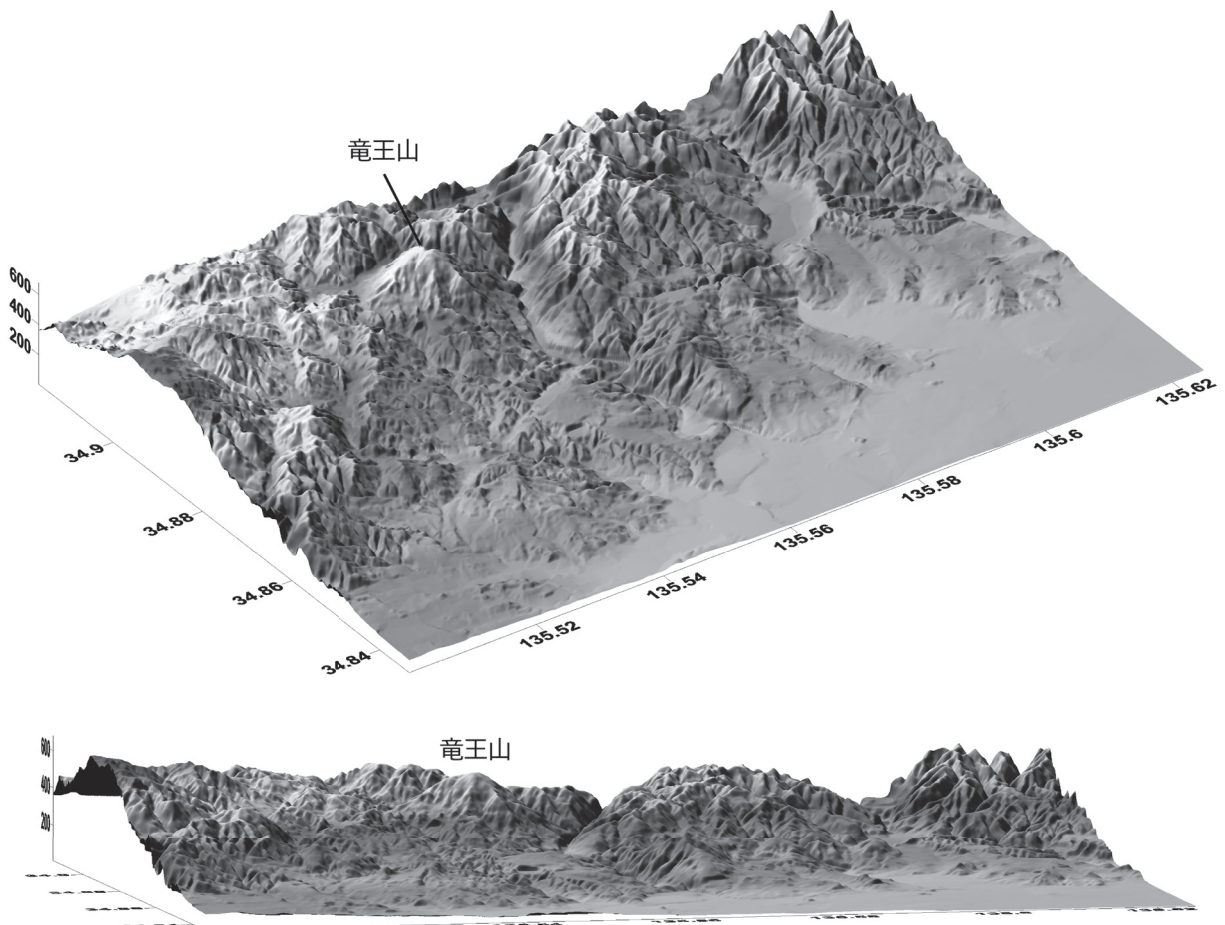


図3 北摂山地と竜王山（清水 2015）

である(図2)。須恵器(図2-1)は9世紀代、瓦器(図2-2・3)は12～13世紀、青磁(図2-4)は中世後半と考えられる。いずれも細片である。また、須恵器は杯部内面に墨が付着しており、硯として用いられた転用硯である。

この転用硯は史料1に忍頂寺が登場する時期の資料であり、かつ識字層の存在を示す可能性が高く、忍頂寺の存在を裏付ける重要な考古資料と考える(清水2015)。さらに、上述したように、七高山の成立は9世紀後半にさかのぼると考えてよいことも踏まえると、竜王山は9世紀代には七高山のうちの一つである神岑山であり、そこには御願寺である忍頂寺が存在したとみてよいだろう。

ただし、古代の忍頂寺が現在の「忍頂寺」(旧・寿命院)の位置にあったかまでの判断は難しい。しかし、上記採集資料から、現在の「忍頂寺」地点が少なくとも9世紀代には寺院の一部として機能しており、古代から中世にかけて利用されていたと想定することはできるだろう。

3. 竜王山における考古学的調査

近年、竜王山で測量調査や発掘調査が実施され、考古学的情報の蓄積が図られた。その詳細は『竜王山・忍頂寺の調査1』(京都府立大学考古学研究室2019)に報告されている。ここでは、その成果の概要について簡単に紹介することにした。

現在の「忍頂寺」境内は竜王山を背に本堂や観音堂などが建てられており、北東には八所神社が

ある。これら「忍頂寺」境内やその周辺では、道によって接続される平坦面が数多く存在する(図5)。これらの形成時期を知ることはできなかったものの、中世や近世の整地を発掘調査によって確認できた。また、9世紀後半～10世紀前葉の須恵器を表採できたほか、江戸時代後期の矢穴石を確認できた。史料にみえる江戸時代初期からの寺院再興後にも、寺院が整備されていたことがうかがえる。

「忍頂寺」から東北へ登った地点に医母水がある。地元に住んでいた矢野勝氏によると、以前は水がよく湧いており、霊験あらたかによく効くと評判で、大阪や神戸あたりから信者が水を汲みに来ていたとのことである。平成元年頃に水が干上がり、現在は若干湧く程度である。医母水周辺は今回の測量調査と発掘調査により、中世に造成され用いられてきたことが明らかとなった(図4)。また、この地区から八所神社にいたる道もあり、「忍頂寺」境内から一続きの場所であることも確認できた。調査地点より下方にも平坦面が存在しており、それらが寺坊をなしていた可能性も想定され、中世に拡張した忍頂寺の姿を想像できる。

なお、「忍頂寺」に伝わる縁起の一つは、聖武天皇の時代、行基が賀峯山を訪れ、光明輝く岩中より薬師如来を得て、これを岩泉に浴し、本尊としたことに始まると伝えている。この薬師如来を浴した泉を医母水といい、諸病平癒の霊泉と伝えられている(滝沢1999)が、今回の調査成果を踏まえると、忍頂寺における行基伝承の成立は中

世以降のものと考えることができよう。

竜王山山頂には平坦面の存在及び礎石が散在していることから、以前より時期不明ながらも寺院の存在が推測されていた(清水2015)。測量調査により、南斜面に平坦面が雛壇状に分布し、そこにいたる溝状の参道も2筋見出だせることが明瞭となった(図6)。この地点の採集遺物には、忍頂寺が文献史料に登場する9世紀中頃をややさかのぼるものもあり、この山頂南

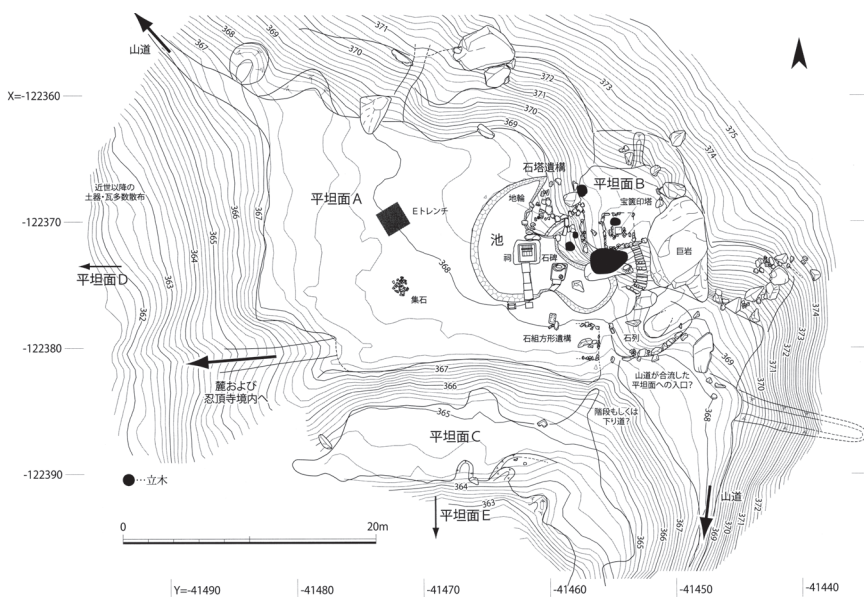


図4 医母水地区(京都府立大学考古学研究室2019)

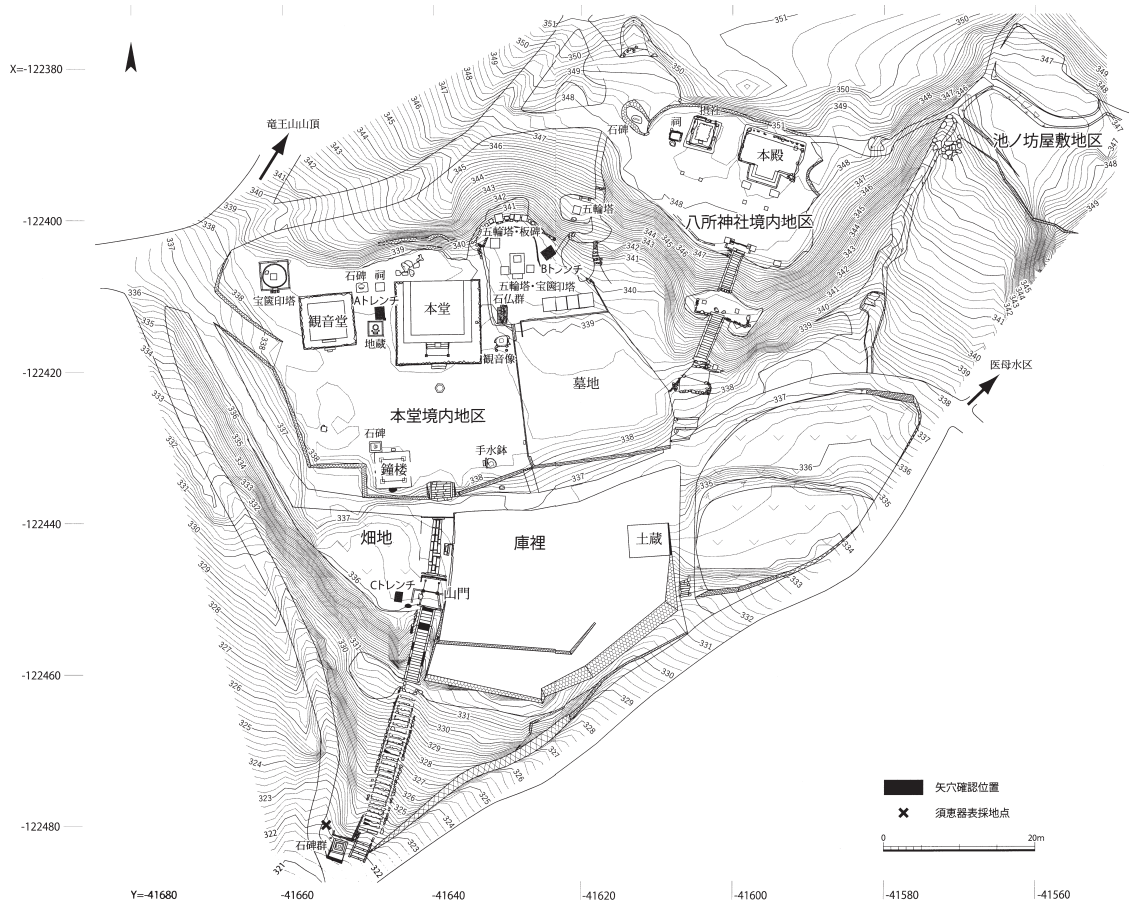


図5 「忍頂寺」境内とその周辺 (京都府立大学考古学研究室 2019)

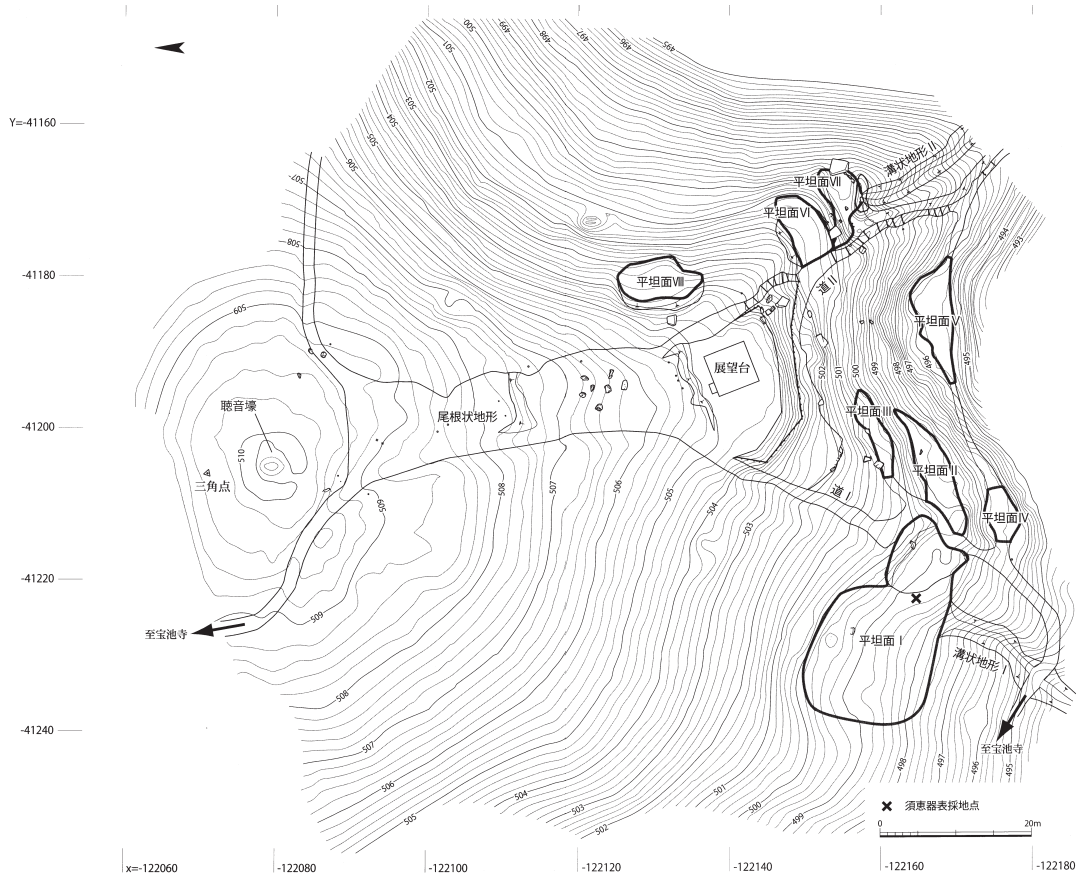


図6 竜王山山頂周辺 (京都府立大学考古学研究室 2019)

斜面の平坦面の形成が忍頂寺の成立と関わる可能性が高くなった。また、2本の参道の一つは医母水地区へ向かっており、現在の「忍頂寺」境内に接続する可能性、さらには古代の忍頂寺が麓の拠点と山頂近くの拠点との2ヶ所によって構成される可能性が指摘されている（菱田 2019）。

ところで、『御室相承記』の仁和寺道法親王が忍頂寺で供養をおこなった記事の裏書には、忍頂寺の薬師如来の靈験を伝える話がのこっている。元暦元年（1148年）正月晦日に火災により忍頂寺の堂舎が消失した。寺辺村の清水寺の僧勝西の夢に本尊仏が現れ、堂が焼けた際に山に逃れたことを告げた。そこで人々が山中を探し求めたところ、旧道を通して本堂から三丁ばかり山峯で、岩の上に白檀造の等身薬師如来立像を発見したという。この火災時に、煙の中から黒いものが山峯に向かって飛んでいくのを泉原村の百姓が目撃している。ここに登場する清水寺は竜王山の南東麓にかつて存在した寺院である。また、近世の史料ではあるものの、『撰津名所図会』に忍頂寺は「いにしへは山峯にあり」と記されており、この薬師如来譚と合わせて、忍頂寺の伽藍の広がりをおぼろげにわけてくれる（福留 2012a・岡島 2019）。考古学的調査を経て、この広がり的一端を確認できたと評価できるだろう。

4. 忍頂寺五カ村と千堤寺遺跡群

ここまで古代を中心に、竜王山と忍頂寺についてみてきた。このような霊山や寺院の存在は、茨木市域北部の地域社会に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

忍頂寺は10世紀から12世紀の間に仁和寺の末寺となったことが知られている。顕証本『仁和寺諸院家記』の仁和寺直末寺条には「忍頂寺（撰州）」とある。また、西大寺僧叡尊が著した『感身学正記』の弘安6年（1283年）年10月条には、自身が忍頂寺に訪れ、薬師堂で十重戒を説き、334人に菩薩戒を授け、「五カ村」に殺生を禁じ、殺生具を焼かせたことが記されている。

この「五カ村」は史料上で忍頂寺五箇荘や忍頂寺五カ村と呼ばれる寺辺、泉原、佐保、音羽、銭原の諸村を指し、仁和寺領荘園として支配されていた。寺辺村が負担する費用の収支を記載した仁治2年（1241年）の所当散用状には、除田として、

「大歳田」、「鳥居宮」、「延福寺」、「白牛寺」、「西方寺」、「観音大門」という地名がみえる。このうち、「大歳田」と「延福寺」は現在の茨木市大岩に推定でき、「観音大門」は大門寺（茨木市大門寺）を指すことから、寺辺村は竜王山から南麓にかけての地域と考えられる（福留 2012a）。寺辺村以外の、泉原、佐保、音羽、銭原は現在もその地名がのこっている。また、寛喜2年（1230年）の「勝尾寺四至注文」に「東限泉原（御室御領（後略）」）とあり、泉原が勝尾寺と接する西限であったことがうかがえる（図7）。

さて、このような忍頂寺五カ村の実態については、長らく検討する資料がなかった。しかし、新名神高速道路建設に伴う千堤寺遺跡群の発掘調査において、寺辺村に該当する地点の古代から近世にかけての様相が明らかとなった。

以下、調査成果について報告書（大阪府文化財センター 2015）を参考にみていこう。まず注目したいのが、千堤寺西遺跡7区の調査成果である。第2面（図9）でピットや土坑、掘立柱建物、耕作痕とみられる溝が見つかった。これらは第3層に含まれる遺物から、8世紀末葉を上限とし、10世紀前葉を下限とする9世紀代を中心とする時期、および10世紀前葉を上限、11世紀後葉を下限とする10世紀後葉～11世紀前葉とする時期に展開した可能性が高い。前者の時期は『日本三代実録』に忍頂寺が登場する時期（860年）であり、忍頂寺の前身である神岑山寺が存在した時期から、この地に居住域が小規模ながらも展開していたと考えられる。これより古い時期の遺構や遺物は未発見であることから、この地域における人々の居住開始は神岑山寺との関係で捉えられる可能性もあるだろう。

千堤寺市阪遺跡1区では、10世紀後半から11世紀の建物1棟、12～13世紀の建物4棟（図10）のほか、溝や多数のピットが見ついている。これらの遺構は出土遺物から10世紀後半から13世紀のものと考えられる。また、居住域の東方には棚田が広がるほか、西側丘陵の頂部（千堤寺市阪遺跡2区）には12～13世紀の中世墓が見つかり、この居住域との関連が考えられている。当該期における居住域・生産域・墓域のセットをうかがえる好事例である。

千堤寺西遺跡1区でも12～13世紀の居住域が



図7 千提寺遺跡群とその周辺の遺跡

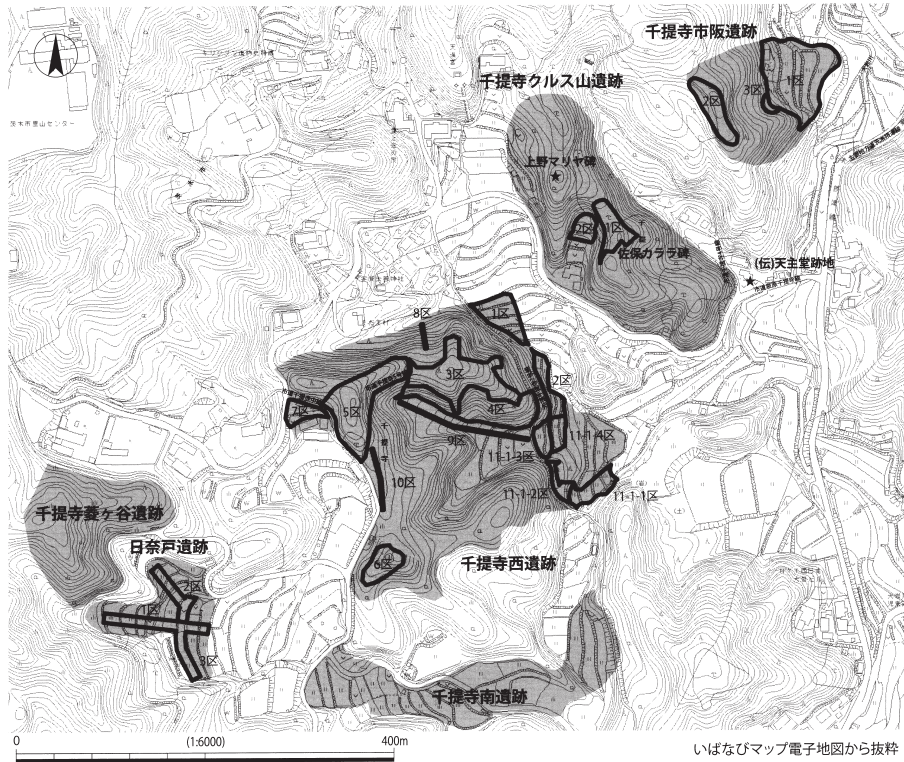


図8 千提寺遺跡群とその周辺の遺跡（大阪府文化財センター 2015）

表1 千提寺遺跡群の遺構変遷（大阪府文化財センター 2015）

		世紀																													
		西暦																													
		800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900	2000																	
墓域	千提寺西遺跡3・4区																					仏教	キリシタン時代	潜伏キリシタン時代	カクレキリシタン時代						
	千提寺西遺跡5区																						1241	1321	1574	1578	1612	1637	1873	1919	1926
	千提寺西遺跡6区																														
	千提寺市販遺跡2区																														
	千提寺クルス山遺跡1区																														
居住域	千提寺西遺跡1区																														
	千提寺西遺跡7区																														
	千提寺市販遺跡1区																														
生産域 (棚田)	千提寺西遺跡11-1-1~1-4区																														
	千提寺西遺跡1・2区																														
	千提寺西遺跡7区																														
	千提寺西遺跡9区																														
	日奈戸遺跡																														
千提寺市販遺跡1区																															
千提寺クルス山遺跡2区																															
宗教・歴史的環境																															
		860																													

■ 中世墓 ■ 長方形墓 (キリシタン墓) ■ 近世墓 ■ 現代墓 ▨ 火葬場



図9 千提寺西遺跡7区第2面前面 [南東から] (大阪府文化財センター 2015)



図10 千提寺市坂遺跡1区第2面建物群 [南から] (大阪府文化財センター 2015)

確認できるほか、千堤寺西遺跡・日奈戸遺跡・千堤寺市阪遺跡・千堤寺クルス山遺跡では棚田が見つかっている。棚田は10世紀にさかのぼる可能性が指摘されており、少なくとも12～13世紀には広く棚田として開発され、14世紀には谷頭まで棚田が広がる。このように居住域に伴い棚田が広がる様子を、仁和寺領荘園時の景観と考えるとよいだろう。また、千堤寺クルス山遺跡ではソバ栽培の可能性も指摘されており、稲作以外の生産もおこなわれていた。

千堤寺遺跡群のほかに発掘調査事例がないことから推測の域はでないものの、ほかの忍頂寺五カ村においても、千堤寺遺跡群のように、小規模な居住域とそれに伴う棚田や墓域をもつ村が点々と展開しており、それが仁和寺領荘園の実態であったと推測される。

また、前述した竜王山山頂の参道は寺院関連施設だけでなく、安元、車作などの現在の集落へと続いている。そのため、竜王山を取り巻くこれらの集落は忍頂寺との関係のもとに成立して、現在に続いている可能性も推測できる。

5 おわりに

本稿では先学の研究成果や前稿（清水2015）をもとに、史料や発掘調査成果などから、古代における竜王山や忍頂寺、その周辺に広がる忍頂寺五カ村についてみてきた。

具体的には、竜王山が古代における七高山の一つ、神岑山であること、そしてその麓に位置する忍頂寺は860年に清和天皇から寺名を賜った御願寺であり、ほかの七高山と同様、朝廷のために薬師悔過を修していたことなどを確認した。

また、近年の竜王山や「忍頂寺」、さらには千堤寺遺跡群の発掘調査成果を紹介し、忍頂寺の成立を契機とした周辺地域における集落の展開、さらには仁和寺領荘園としての開発の様相について検討した。

今後も資料の蓄積を図りながら、研究を進めていく必要があることを付言して、本稿を終えることにしたい。

註

1) 本稿では、現在の忍頂寺（旧・寿命院）を「忍頂寺」と表記し、古代の忍頂寺とは区別する。

2) 影印版真福寺本による。

参考文献（五十音順）

- 茨木市立文化財資料館 2017『龍王山をめぐる信仰と人々 - 山岳寺院の軌跡 -』
- 大阪府文化財センター 2015『千堤寺西遺跡 日奈戸遺跡 千堤寺市阪遺跡 千堤寺クルス山遺跡』
- 岡島陽子 2019「史料からみた忍頂寺の沿革」『竜王山・忍頂寺の調査1-仏都圏の研究1-』京都府立大学考古学研究室 pp.7-11
- 川岸宏教 1990「山岳寺院」『大阪府史』第2巻古代編 大阪府 pp.900-932
- 京都府立大学考古学研究室 2019『竜王山・忍頂寺の調査1-仏都圏の研究1-』
- 榎木謙周 2012「忍頂寺の成立と竜王山」『新修茨木市史』第一巻 通史1 茨木市史編さん委員会 pp.533-538
- 清水邦彦 2015「竜王山信仰と忍頂寺」『龍王山をめぐる信仰と人々 - 山岳寺院の軌跡 -』茨木市立文化財資料館 pp.17-20
- 高橋伸拓 2015「近世における諸寺院の展開」『龍王山をめぐる信仰と人々 - 山岳寺院の軌跡 -』茨木市立文化財資料館 pp.21-22
- 滝沢幸恵 1999『北摂古寺巡礼』吹田市立博物館
- 西本幸嗣編 2015『大阪の修験と西方浄土-神峯・葛城山と日想観の山寺-』高槻市立しろあと歴史館
- 菱田哲郎 2019「考古学からみた忍頂寺」『竜王山・忍頂寺の調査1-仏都圏の研究1-』京都府立大学考古学研究室 pp.47-48
- 福留照尚 2012a「一一世紀前半までの荘園」『新修茨木市史』第一巻 通史1 茨木市史編さん委員会 pp.603-625
- 福留照尚 2012b「内乱と在地の動き」『新修茨木市史』第一巻 通史1 茨木市史編さん委員会 pp.678-694
- 藤岡穰 2008「竜王山と忍頂寺の仏教美術」『新修茨木市史』第九巻 史料編美術工芸 茨木市史編さん委員会 pp.678-694
- 免山篤 1999「考古資料からみた清溪周辺」『彩都周辺地域の歴史文化総合調査報告書』大阪府文化財調査研究センター pp.373-396
- 吉川真司 2019「忍頂寺と神岑山寺」『竜王山・忍頂寺の調査1-仏都圏の研究1-』京都府立大学考古学研究室 pp.49-50